

創作ノート

「ヒューマノイドのヴィルレー第二番」  
— パーカッションアンサンブルと弦楽、ピアノのための  
オーディオビジュアル作品

**Virelai of the Humanoids No. 2**

**— Audio-Visual Composition for Percussion Ensemble, Strings, and Piano**

灰原 工司

Koji Haibara

作曲家

Independent Composer

概要

このステイトメントは2025年2月から灰原工司によって作曲された電子音楽作品、「ヒューマノイドのヴィルレー」の改作版、同タイトル第二番についての創作ノートである。

最初のヴァージョンではダダ・シュールレアリスムに影響された、過去作品をコンピューターでカットアップ、リミックスした音響的コラージュの作品であったが、作品の再現性を高める為、電子音ではなく実音での作曲が必要と考え、現代音楽、民族音楽の音楽理論を参考に改作し、新たなタイトル番号を付与した。タイトルにあるヴィルレーとは13世紀フランスの世俗歌曲の形式名称であり、終始部分が開始部分を左右反転させた反行形になる、という特徴を持つ。本作のパーカッションアンサンブルの部分でこの形式が引用される。

ところで、現代音楽までの西洋古典音楽では、音楽技法の発展は和声、対位法がその中心であり、実作では旋律の動機の発展にスポットが当てられるという側面があり、リズムや音色は、どちらかと言えば独立した作曲の方法論というよりも、演奏に関わる実践と訓練、という部分が大きかったと私は考える。

ところが、作曲家のスティヴ・ライヒは1972年に、リズムと音色、それ自体を構造化する作品、「クラッピングミュージック」を発表する。また、それに先立ち、オリヴィエ・メシアンが1944年に著した音楽理論書「音楽言語の技法」では、リズムを対位的に扱うリズムカノン、不可逆リズムなど、西洋音楽の方面からリズム作曲に関する方法論が提示された。

本作品においても、骨格になるのはリズムと音色、言い換えれば数的秩序と音響対比である。これは最初から設定されたテーマというよりも、バラバラな構成要素を統一するための方法論として、現代音楽、民族

音楽におけるリズムの理論を参照したと言える。具体的な作曲法については以下に述べる。

This statement outlines the creative process behind Virelai of the Humanoids No. 2, a revised version of an electronic music work composed by Koji Haibara beginning in February 2025.

The original version was conceived as a sonic collage composed by means of computer-based cut-up and remix techniques, drawing upon influences from Dada and Surrealism. However, in pursuit of greater reproducibility and performative viability, the piece was subsequently restructured for acoustic instrumentation rather than electronic sound. The revised version incorporates theoretical frameworks from both contemporary and ethnomusical traditions, and is accordingly designated with a new serial number.

The term virelai, found in the title, refers to a secular song form that flourished in 13th-century France. A defining structural feature of the virelai is that its closing section is an inversion (left-right reflection) of its opening. This formal archetype is explicitly quoted in the percussion ensemble section of the work.

Historically, the development of Western classical music through to the contemporary period has largely centered on harmony and counterpoint, with compositional practice often focused on the elaboration of melodic motives. In contrast, rhythm and timbre have tended to be treated more as matters of performance practice and instrumental technique rather than as autonomous compositional parameters.

However, in 1972, composer Steve Reich presented Clap-

ping Music, a work that explores the structuring of rhythm and timbre as compositional material in their own right. Prior to this, Olivier Messiaen's *Technique of My Musical Language* (1944) introduced a range of rhythm-based compositional techniques from within the Western classical tradition, such as rhythmic canon and non-retrogradable rhythms, offering an early theoretical foundation for rhythm-centric composition.

In this work as well, rhythm and timbre—more precisely, numerical order and sonic contrast—form the structural core. Rather than being pre-determined thematic elements, they serve as unifying principles applied across fragmented components. The rhythmic methodologies referenced here draw upon both contemporary and non-Western musical theories. Specific compositional techniques employed in the piece are further detailed in the accompanying composer's notes.

## 1. はじめに

本楽曲、「ヒューマノイドのヴィルレー」は、13世紀のフランスにおいて流行し、その後のルネッサンス時代において忘れ去られた歌曲の形式、ヴィルレーを、現代的な音響により蘇生する事を主な構成プランとして、コンピューターとシンセサイザーを用い、灰原工司によって2025年2月ごろから作曲された。本来はダダ・シュールレアリスムに影響されたカットアップ/リミックス的な音響的コラージュの作品だったが、現代音楽の研究を経て大幅に改作され、新たなタイトル番号を付与した。

ヴィルレーとは、回転する、させるという意味のフランス語“vire”に由来し、形式としては常にAbbaAの順で構成され、最後のAの部分が冒頭のAを左右反転させたものになる、という特徴を持つ。このジャンルにおける重要な作曲家はギョーム・ド・マショーである。

## 2. 提案手法と分析

全体は随所に間奏、挿入フレーズを織り込んだ巨大な2部構成である。

序奏ではクラスターに続き全曲を統一するリズム主題が現れる。リズム主題は以下のような数列を用いる。

3:1:4:1:2.5:2:2.5:2:3.5:0.5:4.5:0.5:1:4:1:3

この数列においては対称性と非対称性が混在し、その内部で徐々に数値が変動するという性質が観測されるだろう。この主題は全曲を通じ縮小、倍化、分散、反転などの操作で変型されながらあらゆる部分で用いられ、楽曲全体においてある種の定旋律のような機能を

持つ。このような主題法はストラヴィンスキーが「春の祭典」で示唆し、メシアンがインドのラーガにその萌芽を見出した類型である。

また、挿入句としてセミモジュラーシンセサイザーの多重録音を用いたドロンの部分が現れる。この部分は全ての音素が同一の周波数に基づきながら各々がレゾナンスを変えて多層的な音響を構成している。

リズム主題の分散に続き、ヴィルレーの形式を引用するパーカッションアンサンブルの部分が現れる。ここが第一部である。第一部の全体は中心に1/2に縮小されたリズム主題を配置したシンメトリックな構造。また、パーカッションのポリリズムはジャワガムランの集団即興を意識した。

最低音のボンゴ的な音はリズム主題の基本形に旋律を加えたもので、この上に3つの声部が重なる。各パートはヴィルレーで用いられる韻律を参考にリズムモードを組み合わせたパート、その縮小形を反転させたカノン、自由リズムによるパートで構成される。第一部は全体で4つのスタンザ（中世歌曲における韻律で区切られたフレーズのまとまりのこと。ポップスでも用いられる）で分かれる。

第1スタンザでは基本形、第2スタンザは第1の対句（クープレ）、第3スタンザは第2の逆行形、第4スタンザは第1の反行形となる。

音組織の観点から第一部を俯瞰すると、その開始部分と終結部分では、オリヴィエ・メシアンの提示した7つの移調の限られた旋法から第3番が選ばれる。セクション内の全ての音高を逆行させる第2スタンザ、第3スタンザでは全音音階である第1番が選ばれる。音高の逆行において、旋法外音を発生させないのは第1番の全音音階のみである。20世紀の和声法において、音階の投影展開（逆行）により、旋法外音を発生させることは、響きにアクセントを加えるものとして許容される場合もあるが、リズムと音色の呼応関係を重視する本作品において、旋法外音の使用はあまり効果的ではないと考えた。一方で音高の反行では旋法外音は生じず、従って大きく響きが変化することもない。

第一部が終わると、弦楽器の全奏によりリズム主題がクラスターによって提示され、第二部の開始が予告される。第二部はリズム主題による拘束から一時的に解放される。但し、全体の拍数はリズム主題の合計数を掛け合わせた360拍を基礎とする。これを素因数分解すると5と3と2になるので、ここからポリリズムへの展望が開かれる。

第二部はテンポ変換により、実際には第一部と同一のテンポを用いながら加速しているように聞こえる。また、シーケンスが徐々に音数を減らしていくことで二重の加速効果を得る。パートは全音階によるバツ・オスティナート、徐々に変化するクラスターによるシーケンス、他パートが概ね9拍子であるのに対し15拍

子によるポリリズムを用いるピアノ、その他パーカッションで構成される。最後のリズム主題提示に向かって、ピアノとクラスターによるシーケンスが緊張感を高めながら音域上昇していく。

### 3. おわりに

概要でも述べたように、戦前から戦後にかけて、リズムと音色を独立した作曲の一分野に含めるという傾向が現れてきたと、私は考える。本作品も、そのような歴史的前提を踏まえて作曲されている。電子音楽も含め、新しい音響モデルに対し、どのような秩序ーリズムをもたらすのか、という事は、音楽の原初的で基礎的な成立要件であるのと同時に、希望でもあるのだろう。

音楽の歴史性、という観点からすると、18世紀、古典派の時代にはバロック時代の音楽様式が古典として参照されたように、21世紀の現代においては20世紀当時の前衛の様式が古典として位置付けられるだろう。古典という観点から20世紀の前衛を捉え直し、その時代において提示された方法論を元に作曲を進める上で、いくつかの関心が生じた。一つは現代のデジタル作曲においては通例となっているテンポ変換の柔軟性、そして固有の響きに対して固有のリズムをいかにもたらすのかという事である。20世紀の時点で、このような問題は突拍子のないものに思えたかもしれないが、現代の観点からすると、音楽的発展の可能性に満ちたアイデアであったことが、実作を通じて確認された。

### 4. 参考文献

- [1] オリヴィエ・メシアン 『音楽言語の技法』 細野孝興訳 (2018), ヤマハミュージックメディア.

### 5. 著者プロフィール

#### 灰原 工司 (Koji HAIBARA)

都立総合芸術高校卒、後、新芸術校卒。コンピューター、シンセイサイザーなどを用い、音楽作品を制作する電子音楽プロデューサー。クラシック音楽の理論を土台とし、民族音楽、現代音楽、文学、美術などの影響下で制作を続ける。



この作品は、クリエイティブ・コモンズの表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンスで提供されています。ライセンスの写しをご覧になるには、<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/> をご覧頂くか、Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA までお手紙をお送りください。